

等何れも皆獨特である。従つて私は一つは西班牙の將來の産業の發達及び國力の増進に就て、又一つは其の文學、藝術、人情、風俗、慣習等に就き盡さざる興味を感ずるのである。而かも又同國の國情は、一面將來進歩發達を爲すべき要素を具備して居るけれども又他面に之を阻害すべき條件が横はつて居る、と云ふやうな事を學ぶときは、他山の石も亦自家の誠めと爲すことが出来るやうに考へられて、旁々西班牙に就ては江湖の三顧を煩はし度いと思ふ。而も今日言語の上から觀て、支那語は姑く之を措き、其他の言語としては、西班牙語は英語に次で最も多數の人に用ゐらるゝ所の言語であり特に商業上英語に次ぐ最も有用なる言語である、と云ふやうな事を思ひ合せて、特に西班牙に就ては自他相互に注意を拂つて、將來益々同國の研究をやつて見たいと思ふ。(談)

歐米に於ける戰時中の食料品と賃銀の高底比較

左表は歐米各國に於ける賃銀と物價の對照であるが、之は英國政府が特に選任した特別委員等で調査したものであるから最も信憑するに足る數字である。英國及愛蘭に於ては、千九百十四年以來本年一月末に至る期間の平均小賣市場の騰貴率は一倍三割六分に當る。尤も労働者の生計費目を全部合計して平均すると少しく減少して一倍二割五分となる。之に對して賃銀の騰貴は一倍二割乃至一倍三割となるが、之等の調査は凡て通常週間の収入支出に由つて算出したものである。一週間内の労働時間が減少すると、一時間に對する収入は従つて増加する

譯で英國に於ける労働社會の狀態は千九百十四年度と殆ど同様に良好である。佛國に於ては昨年末に食物及家庭燈火用材料は巴里で一倍八割五分、地方の大都會で二倍一分の騰貴を示した。千九百十七年末に於ける賃銀は、巴里の男工五割乃至七割三分、地方の男工五割乃至七割に上り、女工は巴里で一倍三割一分、地方で一倍二割二分の昂騰を示した。食物の平均騰貴が八割四分から一倍なるに對し、賃銀の平均昂騰率は九割で、兩者の騰貴割合は稍々均衡を保つてゐた。千九百十九年末に於ける賃銀が上述した食物の騰貴率と並行して騰貴したかどうかは判然しないが、千九百十八、九年度に於ては兩者の昂騰割合は實際同一であつた。獨逸に於ける食物の昂騰割合を見るに、千九百十九年八月に中流の家庭の支出が二倍四割に増したが、今日では更に増加し二三割弱となつてゐる。之は同國政府の規定した相場を標準としたものであるが、運輸機關が乏しい結果實際は夫よりも高いさうである。カッセル教授の調査した公報に由ると、食料品は戰前に比して實に五倍に騰貴した。休戰當時の賃銀は男工一倍四割一分、女工一倍六割四分に昂騰した。最近に調査した處に由ると、都會に於ける時間給は二倍に上つたが、週給は一倍三割二分の騰貴である。之は一週間内の労働時間が減少した結果であらう。伯林では之に反して時間給が二倍五割に上り、週給は三倍を示した。何れにしても賃銀の昂騰は食物の騰貴に及ばない。米國では昨年十二月の調査に由ると食料の騰貴は八割八分であつた。賃銀は男工が九割、女工が七割の騰貴で、食物の騰貴と畧並行してゐる。瑞典の食料は(燈火並に薪炭料共)千九百十八年末に於て二倍三割の騰貴を示したが、千九百十九年末には少しく下落して二倍七分になつた。伊太利の食料は千九百十九年四月までに一倍八割一分の昂騰を示した。ミラン市の賃銀は千九百十九年十二月に二倍九割八分の上つた、尤もミラン市は物價の高い都會であるから全國を平均すると二倍四割位であらう。千九百十九年六月に賃銀の騰貴は一倍八割三分であつた。之に由ると、同國の労働者は生計費の膨脹した割合に収入が増加しなかつた事が解る。六月以後に多少増加したらうと思はれるが参照すべき材料が無い。

マルクス主義と文化價値の觀念

慶應大學教授 野村兼太郎

マルクス主義とは如何なるものであるかに就いては、すでに多くの學者の説明し盡したところであつて、今さら詳細な論述は必要でないと思ふ。併し乍ら唯推論の便宜上、簡単にマルクス主義は何を其の根本とするかに就いて略述しよう。すでにマルクスと最も親密であつたエンゲルスも指摘して居るやうに、マルクス説の根本は『唯物史觀論』と『餘剩價値説』とであつて、更に是等の説から推論して資本主義的生産制度の缺陷を暴露して、所謂『科學的社會主義』を樹立したことがマルクスの偉大なる功績である。此のマルクス以後の社會主義を科學的であるとし、それ以前の社會主義即ちサン・シモン、フーリエ、オーエン等のそれを『空想的社會主義』として區別し、マルクスの學徒は甚だ是を誇りとした。マルクスは物質的生活の生産方法が一般に社會的、政治的、及び精神的の生活を條件づけるとして居る必然の結果として、物

質的生活が人類のすべての生活の根本となり、『人類の意識が其の存在を決定するのではなくして、寧ろ之に反して彼等の社會的存在が其の意識を決定するものである』ことになる。これ彼が社會全般の進化の根本に物質的要素を認める其の唯物史觀論の要領である。更に彼が此の歴史觀の眼を轉じて現代の状態を観察した時、それが労働價値説となり、餘剩價値論を生んだのである。彼の労働價値説は是を簡単に云へば、労働に依つて複生産することの出来る商品の價値は、すべて其の生産の爲めに『必要とせられる社會的労働』の分量に依つて決定されると云ふにある。斯の如く簡単に要約する時は種々なる誤解を生ずる恐れがある。併し乍らこゝには一々是を解説すべき暇がない。すでに邦文の好い紹介書もあることであるから、それを参照して頂きたい。斯の如き労働價値説を稱ふる結果、現在の資本主義的生産組織に於いては労働のみに依つて生じ得る餘剩價値を、何等労働に依らずして不當に掠奪して居ることになる。それは生産手段の私有を許して

居る私有財産制度の必然の結果である。こゝに労働掠奪説を生じ、所謂マルクス、エンゲルスの科學的社會主義が勃興するに至つたのである。

マルクスが斯の如き學説を主張するに至つたのは如何なる理由に基くのであらうか。又其の根本となる世界觀は何であらうか、以下是等のことに關して述べようと思ふ。

二

上述したやうにマルクス主義の中心思想は大體に於いて唯物史觀論である。唯物史觀論は何もマルクスに依つて始めて發見された譯ではない。所謂通説に従へばマルクスはフオイエルバッツハの唯物論に依つて、ヘーゲルの唯心論を打破したものであるとされて居る。併しボーナーもすでに指摘して居るやうに、マルクス、エンゲルスに依つて代表される科學的社會主義者の純粹なる學派はヘーゲルの哲學に其の基礎を置いて居るのである。マルクスの『資本論』が公刊された當時其の研究法が嚴密に現實的であるのに、其の表現法は獨逸理想主義の辯證論的であると云ふ批評を受けた。マルクスは是に對して、研究法と表現法とは全然別な方法を探らなければならぬと云つて居る。而して前者が事實の嚴密なる研覈であることを必要とし、唯終局に於いてそれを表現するのには事物の生命が觀念の内に反映されるならば、我々が先天的構

造を持つやうに見えるのであるとして居る。併し乍らマルクス自身は自己の辯證法はヘーゲルのそれとは全然異なつて居る。全く正反對であるとして其の同一のものでないことを主張してゐる。即ちヘーゲルにとつては觀念と云ふ名稱の下に獨立の主體として思想的體系を作成したものであるが、マルクスにとつては觀念等と云ふものは單なる人間の頭腦の中で作り上げられた物質的事實に外ならないのである。即ちこゝに於いてマルクスがフオイエルバッツハの人類學的唯物論に依つて、ヘーゲルの唯心論を打破したのであると云はれるのである。けれども其のヘーゲル流の考へ方の影響を受けて居ることは否定することの出来ない事實である。

其の外マルクスに著しい影響を與へたと考へられるものはダーウインの生物進化の説、サン・シモンの歴史の經濟的解釋直接にはブルードンの社會思想等であるが、更に彼が斯の如き唯物論を稱へるに至つた原因としては、彼が猶太人であり且つ故國の政府から屢々國外に追放されたと云ふ事實も亦算ふべきであると思ふ。併し乍ら今是等の問題に就いて述べて居る餘裕がない。直ちに彼の學説を追求すれば、如何なる結果に到達するかに就いて論じよう。

マルクスの説はそれが科學的と云ふが如く全然理想的觀念を排除せんと努めて居る。實際に於いてマルクス自身の生活が全然理想的觀念を缺如して居るとは、其の傳記に徴しても

是を肯定することは出来ないが、少くとも彼の學説を徹底すれば、さう考へるより外はない。マルクスの云ふ處に依れば社會組織の進化と云ふものは、常に生産力の變動に従つて生ずるのであるが、一度生産力が變化するとこゝに利害を異にする二箇の階級が對立する。此の兩階級は新しく生じた生産組織に適應するが爲めに、互に争闘するに至る。かくして對立があつて進歩を生じ、歴史は次第に發展したのであると云つて居る。而して是等の發展はマルクスの説を徹底的に論究すれば必然的に到達し得るものであつて、吾人人類は是に對して如何ともなし得ない筈でなければならぬ。所謂唯物論的定命主義である。故に吾人は資本主義制度を否とし労働者側を是とし、社會主義的生產組織を樹立すべき倫理的根據は全然無いのである。即ちある意味に於いて社會組織は自然に自ら發展すると云ふ樂天説であるとも云ひ得るのである。

今此の階級争闘に就いて考へて見よう。所謂マルクスの云ふやうに二つの階級が常に對立して居るとは考へられず、又それ等の階級を包含した一つの國家と他の國家との間にも争闘はあり得ると云ふやうな反對は暫く置いて、古來の歴史を眺めるとある程度迄マルクスの云つて居ることは眞實である。貴族主義に對して起つた資本主義。資本主義に對抗する社會主義。事實大體に於いて利害反する二箇の階級が對立して、生産手段の變化と共に次第に支配階級の變化を生じて居

る。此の際例へば資本主義を擁護せんと欲する資本家、若しくは資本主義を打破して新しい社會組織を形成しようとする所謂労働者階級の何れをも善であるとすることも出来ない。然るに吾人は往々にして是等の争闘に對して善惡の判斷を下して居るのを見るのである。所謂マルクス主義者に依れば労働者は一致團結して是等資本家の不當なる掠奪に對抗しなければならぬ。さうである。何が故に資本家が自己に最も都合好き現制度組織を維持するが爲めに努力するのが不當なる掠奪であるのか。働き蟻が雄蟻が其の職を果してしまつて不用になつた時に是を殺してしまうことが、蟻の仲間において不當でないやうに、資本家が労働者を酷使しても一向差支へないとされないのである。若し人間があらゆる他の動植物と同様に全然唯物論的のみ行動するのであつて、道德等と云ふものは其の當時の支配者階級に最も便宜であると考へられる法則と見做されるとしたらならば、吾人は所謂社會改良の諸運動、労働者の解放等の種々なる行動に對して善として是に賛成するのを躊躇しなればならぬ。然るに吾人が現在に於ける資本家の行動を不當なる掠奪であるとする所以は何であらうか。それは多數なる労働者の利益を少數なる資本家が壟斷するからであると云ふ。然らば何が故に少數者が多數者を壓迫してはならないのか。且つ又過去に於いても同じく労働者の數は資本家の數よ

りも多くはなかつたのか。奴隷は貴族よりも數が多かつたらう。然るに何等の争闘の起らなかつたことがあつたのは何が故であらう。蓋しそれ等多數者が未だ自己の人格を自覺しなかつた爲めである。否生産手段が未だ發達しなかつたことが其の根本であると唯物論者は云ふかも知れない。一步譲つて生産手段の發達しなかつた爲めであるとしよう。併し何が生産手段を發達させたのであらうか。吾人は著るに困つて現在のやうな服装を作つたのだらうか。其の他すべての機械、電氣、瓦斯等は盡く窮餘の一策から案じ出したものであらうか。唯物論者の云ふが如く恰も饑餓に驅られた動物が食物を得んとして多大の努力に依つて獲得した技能が、其の動物に之の進化を齎したと考へるやうに、人間のすべての文化的成果も亦斯の如きものであるとなすことが出来るだらうか。勿論人間も一の生物である以上さうした種類の影響を蒙ることを免れないが、蜂が常に同一の生産手段で満足して居るやうに、人間も同一の生産手段で満足して居なかつたのには何等か他の動植物と異なつた點があるからであらう。更に前述した道徳的價値判斷に就いても、又人間の生活に他の生物と異なつた價値的生活があると云ひ得る。一々詳細に議論するのは煩はしいからこゝには省略して、直ちに吾人の生活そのものを觀察して見よう。

前にも述べたやうに人間も一の生物である以上、周囲の事情に應化してゆくことが必要である。併し乍ら人間の應化は暗中に住む鰻の一種が其の生活に順應するが爲めに不用の眼を失ふやうな應化のみではない。資本家階級から酷使される労働者が其の壓迫に耐へ得るやうに順應許りして居るであらうか。こゝに労働者が資本家に對して反抗せんとするのは即ち労働者階級の自覺に基くものである。人間が一の生物であつて其の本能的な生活として自己の生命を持続しようとする事は、あらゆる他の生物と少しも變らない。同じく自己の生命を犯さんとするものがあれば、極力是を拒否しようとする。又吾人のすべての本能は最もよく其の生命を維持するに預つて有力である。例へば孩兒の母乳を巧みに吸入するが如きは其の適例である。併し乍ら吾人の生活は單に斯の如き衝動的な本能生活許りではない。此の本能的な世界にあつては吾人は殆ど外界の支配のみに左右されるだらう。晴れれば外に出て食物獲得のために働き、降れば巢に歸つて休む。假令同族であつたとしても役に立たなくなれば遠慮なく殺してしまふだらう。さうした生活以上に出づることは少しもなく、ある意味に於いて不安のない幸福な世界であると云へるだらう。然るに吾人が不安を感じたり、現在

の生活に對して不平不満であるのは何が故であらうか。即ち現在の生活に對してある種の價値判斷を下すからである。吾人が心に不安を感じるのは、ある場合には現在なしつゝある生活に於いて自己の價値が不當に評價されて居ると感ずるからである。而して現在の制度に不平不満を感ずるのは少くとも將來に於いて或理想の實現を期待するからである。斯の如く吾人が理想を抱懐する所以のものは、吾人に他の生物と違つた一つの生活があるからである。若しマルクス主義者のやうに考へるならば、現在のある文化の所産は蜂の巢、蜘蛛の網と同様でなければならぬ。それならば如何して何がマルクス主義者をして、是等の文化的所産が物質的本能的産物に過ぎないと斷定を下させたのであらうか。

然らば人類の他の生活とは何であらうか。即ち吾人が自己の自由意思を以てすべてのものを觀察し、其の自己の天賦の才能を出來得る限り發輝して自己を主張せんと欲する價値の世界である。此の世界に於ては吾人は常にある理想を終局の目的として考へる。而して其の理想に到達せんとして努力するのである。吾人は此の理想を文化價値の完成であると思惟する。此の文化價値は吾人が不斷に自己の天賦の才能を充分に發輝せんとすることに依つてのみ到達され得る。斯の如き文化價値を絶えず創造して行かうとするところに、吾人のすべての價値判斷は其の基準を發見することが出来る。而して

是に依つて一歩々々努力し精進してゆかなければならない。

四

然らば吾人人類の生活上の行動は如何にして此の文化價値に係はるのであらうか。若し吾人の生活が衝動的な本能生活のみであつたならば、所謂自然科学的因果律に依つて、充分周囲の事情を正確精密に觀察しさえすれば、其の將來に於ける生活をかなり確實に、少くとも天氣豫報位の程度には豫測することが出来る筈である。併し吾人には自由意思の生活がある。此の生活を規定するものは斯の如き因果律ではない。だが全然無規範のものでもない。放恣カウレキユアの生活とは全然區別されなければならない。吾人が或行動をなすに當つて其規準となるべきものは、既に前述したるが如く、文化價値である。若し吾人が最も文化價値に對して正當である行爲をするならば、其の行動の全體は一つの價値づけの過程として採らざるべからざる道程を辿るものである。例へば小説家が創作に従事するとする。其小説家が有つて居る材料を如何に取扱ふともそれは彼自身の勝手である。悲劇にしようとするか、喜劇にしようか、それは彼の見地に依つて如何やうともなし得よう。けれどもそれが何れであつても苟も傑作を作らんとするのであるならば、換言すれば文化價値に叶ふものであるならば、其の材料を一の作品に創造してゆく過程に於いて何等かの必

然性がある。恰も甲と云ふ場所に到達するには幾多の途筋があるだらうが、最もよく且つ短き途は一つよりないやうなものである。是は亦直ちに吾人の生活に對して適用することが出来よう。各人は種々なる異なつた天賦の才能を持つて居る。其の才能を充分に發揮しようしまいと、又政治家にならうと學者にならうと實業家にならうと、それは各人の勝手である。(云ふ迄もないが今日の制度に於いては、斯の如き自由さへ各人すべてに與へられて居るわけではない。尙ほ此のことに就いては後に述べる。)併し乍ら若し吾人が自己の天賦の才能を充分に發揮せしむる、換言すれば文化價値に最も貢獻ある生活をしようとするならば、自ら其處に一定の行程がある筈である。併し乍ら人間の下の判断は先づ其の經驗から歸納するのが普通である。然るに經驗によると云ふことは誤りがあり得ると云ふも同様である。従つてある場合——寧ろ多くの場合に、自己の才能を無視して、文化價値に對して寄與することが少ない場合があり得る。又併し其の誤りがあり得ると云ふことが、更に一層吾人をして努力せしむる所以ともなり得るのである。

以上論じて來た處に依つて見ても明かなるが如く、各人は各自に其の才能を充分に發揮すること、換言すれば各自の個々の價値完成に努力し得ることが其の理想である。而して斯の如き個々別々の價値完成を歸一統一するものとしてこゝに

先天的なる文化價値の觀念を基本とするのである。吾人のあらゆる行動が倫理的に善であると判断されるのは、唯斯の如き文化價値に對して多少とも貢獻しつゝありや否やと云ふことに依つて決定される。而して少なくとも吾人が目して理想的の社會であるとする處のものは、各人が其の自由意思に依つて、斯の如き文化價値の建設に努力し得る社會でなければならぬ。現在の社會は果して如何であらうか。以下現在の社會組織に於いては、未だマルクス主義者の指摘する處の缺陷を先づ完成することが焦眉の急務である所以を述べて、本論文を終りにしようと思ふ。

五

以上述べたやうに、マルクス主義の缺點は此の人類社會を單に機械的に因果的に觀察して全然沒價値なる唯物論的宿命主義に墮したと云ふ點にある。併し乍ら假令それ等の缺點はあるにしてもマルクス主義は容易に破棄すべきものではない。以下其の理由を述べよう。

前述したやうに吾人人類の生活には文化價値の建設に對して努力する方面があるが、通常斯の如き努力をなし得る前提には云ふ迄もなく生存を必要とする。勿論ある場合には例へば基督のやうに生命を棄て、より高き文化價値に參與することがあり得る。併し通常一般人を社會全般として觀察する時

には、先づ生命維持を第一としなければならぬ。加ふるに既に前述したやうに、人類の本能的な生活に於いて最も強烈であるのは生存慾である。すでに何等價値完成に貢獻し得ないやうな老人でも、廢疾不具の者でも、尙ほ生きんと欲する事實は屢々實見する處である。かく生存せんとするには先づ物質的獲得を必要とする。即ち衣食住に要する物質はすべて生命を保持することを終局の目的とする。斯の如き物質的獲得と云ふことが社會全般の變化に最も至大なる影響を與へるのは必然の結果である。従つてマルクスの云ふが如く其の經濟的構造が基本となつて法律上及び政治上の上層建築が構成されるのである。こゝに於いてあらゆる文化價値建設の前提として、先づ各人の生命維持に對する保證を與へることが第一の要件である。即ち云ひ換へれば生存權の確立にある。

暫く現在の社會状態を觀察して見よう。現在は所謂資本主義的生産組織の下にあつて、私有財産と所謂契約の自由、營業の自由と稱する美名の下に於て自由競争とを認めて居る時代である。此の制度の下に於て各人は果して生存權を認められて居るだらうか。くどくしく論ずる迄もない。物を重んじ従つて貨幣を尊ぶ資本主義的精神の當然の結果として、人を輕んじて人格を無視し貨幣を所有しない者は殆ど人としての待遇を受けて居ない。況んや生存權の認められやうわけがない。かく自己の生命維持をすら保證されず、而も單に遊秩

安愜な生活をして認められないのではなく、一日營々として勞働して、しかも無資産なるが故に生活を保證されないのである。然るに他方資産を所有して居る階級の者は、よしんば遊樂を事として居たとしても、其の生活は極めて安全である。此の點に於いては少なくとも現在の資本主義的制度は、前述せる如く各人の價値完成を充分に行ひ得ることが文化價値建設に最も叶ふものであるとするならば、不適當なる組織であると云はざるを得ない。こゝに於いてマルクスの所謂勞働價値説及びそれより生ずる餘剩價値論が假令理論上幾多の缺陷があるとしても、其の資本主義の弊害を適切に明示した點に於いて最も意義の多いものである。かくて文化價値の觀念より始めて始めて少數なる資本家が多數の勞働者の利益を壟斷することが不當であると云ひ得るのである。

以上述べて來たやうに現在の社會組織に於いて、最も多くの人々が不安に感ずることは其の生活の保證されて居ないと云ふことである。働いても人間らしい生活が獲得されないと云ふ點にある。所謂道德の腐敗も此の點に發する。吾人は財を得取しない限り生活の保證は得られないのであるから、如何なる手段に依ても財、換言すれば貨幣を獲得しようとする。其の爲めには詐欺偽購等の手段もそれが法律に觸れない限り行ふことを躊躇するものではない。況んや他人の生活問題等を顧慮する暇があり得ようか。現代の罪惡も亦此の點に發す

る。他人の財産を破損すれば直ちに處罰されるが、其の人格を傷けても容易に罪されることがない。少しく眼を開いて現代を觀察すれば至る處に矛盾あり撞著あり、殆どその向ふところを解し難いやうに見える。併し是はあらゆる過渡期に於ける當然の状態である。吾人は現在に於いて文化價値を確立する前提として、先づ第一に生命の持續に對する不安を除くが爲めに、すべての人類の生存權の認めらるゝことを希望するのである。

併し乍ら生存權の確立に依つて、あらゆる人類の不安が一掃されるわけではない。吾人が如何にせば最もよく自己の價値完成を成就し得るや、其の他種々なる精神的焦慮を體驗するだらう。それ等の焦慮は又こゝに新しい不安が發生するに至るだらう。かくて吾人人類は永遠の平和を求めつゝ、永遠に文化價値の完成に戦はなければならぬかも知れない。それは文化價値の完成を目的とすると云ふのも、不完全なる各人の體驗に依る各々の價値完成に基いて居るからである。シエークスピア、ゲーテ等がすでに立派な作品を残した以上、最早それ以下の人間が文學を希望する必要を失ふわけではない。シエークスピアはシエークスピアとしての價値完成を行つたのである。それ以下の文學的才能を有する者と雖も、彼自身の最も適當したる價値完成を行ふとするならば、そこに絶大なる價値を體驗するのである。此の意味に於いて人類は永遠に不安を感じ、永遠に戦ふと云ひ得るのである。尙ほ此の點に關しては述ぶべき必要もあるが、こゝには省略する。

唯吾人が當面の問題とすべきものは先づ生存權の確立である。各人すべてに生存權が認められない限り、マルクス主義者の云ふが如く、常に利害相反する二つの階級の對立争闘を生じ、それから生ずる社會的不安を免れることが出来ないだらう。假りに労働者階級即ち第四階級が資本家階級を倒して勝利を得たとしても、若し彼等の組織する社會制度にしてすべての人間に自由なる生存權を認めないとしたならば、恐らくこゝに新しい第五階級が發生して、それ等が自覺すると共に又々新しい争闘を惹起するだらう。而して社會は斯の如き生存的不安に依つて又もや悩まされることだらう。若しさうであるとすれば假令マルクス主義が沒價値的に社會を觀察したものであつて誤れる世界觀であるとしても、其の生命は更に一層持續されるであらう。吾人は未だマルクスに學ぶべき處が甚だ多い。輕々に思潮の流行に伴なつて轉々すべきでない。吾人の目指す處は文化價値の完成ではあるが、先づその以前にマルクス主義の洗禮を受ける必要がある。マルクス主義の洗禮に依つて社會多數者の自覺を促がし、然る後始めてカントの思索に歸るべきものである。殊に吾人は此の言を我が國現在の社會狀態に對して提供するのである。其の實際的問題に關しては云ふべきことが甚だ多いが、こゝには唯沒價値的なマルクス主義から文化價値の觀念を理想とする思想に向ふべき所以を述べて、其の責を果たすに止めて置く。

(大正九年五月三十日稿)

墨西哥の革命と其人々

東 孤 竹

鎬を削つて政戰の眞つ最中に、墨西哥に革命の烽火があがり、而かもそれが譯なく成功したらしい來電を見た時、第一に私の念頭にのぼつたのは誰あらう即ちオブレゴン將軍その人であつた。

私は議會解散の數日前に墨國の首府に在住する一友人S氏から『最近北方の雄たりしアンヘレス將軍、官軍の手に落ちて悲惨な最後を遂げ申候、グイヤは復讐を叫び居る由なるも、聞けば智囊アンヘレスを失ひて手も足も出ず、早晚やはり官軍の手に落つ可きかとの評判有之由に候。プランケター逝き、サバタ逝き、更に又アンヘレス逝き、亂世の雄達が次第に凋落するは何となく悲しく候。此節はカ

ランザ政府が米領事ジェンキンスを監禁して今尙物議をかもし居り候が、カランザの米國に對する傍若無人の外交振り、いさゝか痛快さすがに野武士の捨て難き味有之候。之に對する米國の態度頗る軟弱(聲ばかりは大なれど)なるは面白き對照に御座候。日本の外交家も少しはカランザにあやかるがよろしく候。

本年七月の選舉の爲めに今から運動を開始致し居り候が、随分面白さうに考へられ候。オブレゴンの連中最も活躍致し居り候。彼に屬する一人の代議士は議會の壇上に演舌して武力に訴へても勝利を得べしと公言致し候。オブレゴンは目下當市に滯留中に候が、彼が入市の當日、小生の知人たる遞信省の一高官が停車場

まで彼を出迎に赴き候處、それが政府の耳に入り翌々日免職に相成り候。以つて現政府の意も知るに足るべく候。』との一節が手簡の中にあつた。

此手簡の一節を讀み、今次の革命の消息を思索すると私は何等かの暗示を得るやうに思はれる。カランザ大統領は登任以來始終一貫した排米主義の巨魁であつた。彼れの勇敢なる對米硬は、對内政略であるとも思惟せしめて居た。

昨年末、私が墨國を視察した當時、同國の上院議員は五十八名、下院議員は二百四十五名であつたが、オブレゴン將軍を首領とする自由憲政黨は、中立派とも稱すべき自由民主黨と落花流水の情を通